

[研究発表要旨]

【共同発表】

AI時代における函館市内の英語教育

——考える力を育成するために——

佐々木 昌太郎（北海道教育大学函館校）

安孫子 美優（北海道教育大学函館校2年）

岩井 悠我（北海道教育大学函館校2年）

奥田 幸樹（北海道教育大学函館校2年）

小林 花瑚（北海道教育大学函館校2年）

桜田 悠空（北海道教育大学函館校2年）

佐藤 日香（北海道教育大学函館校2年）

鶴谷 暁人（北海道教育大学函館校2年）

林 穂乃香（北海道教育大学函館校2年）

私たちの生活の中に AI が浸透し、英語教育においても大きな影響を与えていると考える。私たちは、函館市内の小学校、中学校、高等学校計 8 校の英語教師 9 名にインタビューを行った。流行と不易という二つの観点から捉え、流行では英語教育における AI の活用に関して、不易では主に「考える力」について扱った。実際に英語教師という立場から見て AI の影響を感じているのか、また、どのような場面でその影響を感じるのかを調査した。その結果、AI の効果的な活用方法として、教師は長文添削、問題作成の補助として用いる傾向があることが分かった。教員インタビューの中では生徒の AI の活用方法についても現状を聞くことができ、生徒は、補助ツールとして用いることで英語学習のハードルを下げる、学習意欲の向上に役立てている、自分の文や語彙をより当該の場面にあった表現に変換してもらい英語表現の幅を広げるといった方法があげられた。また、「考える力」という視点からは、AI 時代の中で人間の教師が英語教育を行う意義を問い、今後の AI 時代の教師の在り方を考察した。

EFL 志向型英語教育をめぐる国内文献の動向：スコーピングレビュー中間報告

西村 加奈（レスター大学大学院修士課程）

英語が多様な言語的背景を持つ話者間の共通語として用いられる現状を背景に、国内においても母語話者規範にとらわれない English as a Lingua Franca (ELF) 志向の英語教育が提唱されている。一方、社会では母語話者規範に基づく英語力の評価が、個人の進学や就職などの機会を左右する要因にもなっている。このような二項対立的とも取れる英語の現状を受け、国内の ELF 研究は、英語教育の在り方についてどのような示唆をもたらしているのか。本研究は、このような問いを検討するスコーピングレビューである。母語話者規範への態度、ELF 志向の教育への態度及びその論拠を軸に文献を分類し、示唆の傾向を整理した。予備的には、ELF 研究が英語の多様性を称賛し、ELF 志向型の教育を推奨する傾向にある一方、実社会における評価の問題には十分に向き合っていないことがうかがえた。なお、本発表は進行中の研究の中間報告であり、残る文献の分析と対象文献の拡大を今後の課題とする。

中学校3年間を見通した音読学習におけるエージェンシーの発達
——AI 音声認識を活用した系統的音読学習モデルの構築と途中経過報告——
穴田 晃一（函館市立港中学校）

本研究は、中学校3年間を見通した系統的音読学習モデルの構築を目的とし、AI 音声認識による個別フィードバックと AAR サイクルの習慣化を両輪に、生徒のエージェンシー発達を促す実践研究である。学年ごとに音読技法を段階配置し、同一教師が全学年を担当することで教師要因を統制した縦断的研究デザインをとる。「AAR サイクルの週次記録が習慣化するほど自己調整力が高まり、音読技能向上につながる」という因果仮説を、毎単元 PDSA の「Study」フェーズで検証・修正している。10 月の公開研究会では、他校での普及・再現性の視点から参加者の意見を収集・反映した。本発表では今年度前半の実践経過と公開研究会の結果を報告し、個別最適な音読学習の実現と他校への普及可能性について議論を深めたい。

高校英語ライティングにおける「足場のある学び」を生徒はどう捉えるか
——自己選択型単元と参照可能テストに対する振り返りの質的分析——
佐々木 ちひろ（北海道函館西高等学校）

高校3年生の英語コミュニケーションにおいて、意見文（OREO/OREREO 型）の指導を軸に、生徒が学習課題のレベルを自ら選ぶ自己選択型の単元を設計・実施した。あわせて、発表者が開発した自己表現支援用の生成 AI ツールによる表現確認や、ワークシート等の持ち込みを認めたライティングテストなど、複数の足場を単元に組み込んだ。本発表では、単元終了後に約 200 名から収集した自由記述の振り返りを質的に分析し、こうした「足場のある学び」を生徒自身がどう意味づけたかを報告する。分析からは、自己選択を歓迎する声と選択の基準を求める声が併存すること、「書けた」という達成感と「自力ではない」という留保が同一の学習者の中に共存すること、生成 AI を着想や語彙の相談相手として多様に用いる姿が見えてきた。支援つきの達成を生徒がどう捉えるかという観点から、自己調整学習を促す単元設計と評価のあり方を考察する。

Follow-up Questions を取り入れた Speaking 活動における学習者間 Interaction
——工業高校の英語授業における教室談話の分析——
斉藤 堯仁（北海道北見工業高等学校）

第二言語習得研究では、Interaction や Negotiation が第二言語発達を促す可能性（Long, 1996）、言語産出を通した言語知識の Gap への気づき（Swain, 2005）、言語的正確さよりもメッセージの伝達に焦点を当てること（Nation, 2007）の重要性が指摘されている。一方、高等学校における英語授業の Speaking 活動では、あらかじめ作成した英文の再生にとどまり、学習者間の Interaction が制限される場合もある。

本発表では、Follow-up Question を取り入れた Speaking 活動において、学習者間にどのような Interaction が観察されるかを明らかにするため、学習者間の会話を録音し、発話を分析した。その結果、学習者がその場で「何を言うか」「どう言うか」「何を聞くか」を考え、意味の生成や自発的反応、形式への注意・自己修正など、相手の発話に応じながら会話を展開する様子が観察された。また、文法的な正確さが十分でなくても意味伝達や情報交換が継続しており、Follow-up Question を取り入れた活動では、「英文の再生」を超えた Interaction が生じる可能性が示された。

get受身はなぜ感情を帯びるのか
——評価・因果的さかのぼり (Causal Backtrack) と OCC 理論による統一的説明——
石川 博基 (秋田市立御所野学院高等学校)

*He was fired.*と *He got fired.*は同じ出来事を描くが、後者はより「気の毒に」「自業自得か」といった感情を帯びる。*get*受身をめぐっては、動作主の非焦点化という統語論的側面と、話者の感情表明という語用論的側面が個別に論じられ、両者の関係は未解決である。本発表は *get*の通時的発達から、*get*受身の本質が「有界な出来事の発生」の導入にあることを示し、Langacker (2008)の受身モデルを拡張して「評価・因果的さかのぼり (Causal Backtrack)」を提案する。さらに OCC 理論 (Ortony et al. 1988) に基づき、規範・期待と現実の対比から感情が生まれる過程を体系化し、*get*受身の文脈上の偏り (Carter & McCarthy 1999) も同一モデルで説明する。本研究は統語論・語用論的説明を統合し、学校英語教育の *be/get*受身指導に認知的基盤を提供する。

地方大学の海外研修運営における構造的課題と共同派遣モデル：フィリピン・セブ研修の事例

小野 真嗣 (北見工業大学)

石塚 博規 (北海道教育大学名誉教授)

本発表では、北見工業大学が2026年度に実施したフィリピン・セブ英語研修を中心に、研修構築の経緯、事前研修、現地での学習活動、文化体験、学生アンケート結果を基に教育的効果を検討する。セブ研修はマンツーマン授業による高密度学習と低コストを特徴とし、地方大学の学生が参加しやすい環境を備えている。また現地校や大学、日系企業との連携が得やすく、短期集中型の語学・文化研修を構築しやすい点も利点である。

道内の大学は北海道大学を除き小規模であり、海外研修を単独で運営するには引率、事務負担、渡航費などの面で課題が多い。こうした状況の中、2024年度には北海道教育大学旭川校と旭川高専が合同でセブ派遣を実施し、2026年度には北見工業大学が北海道教育大学旭川校との合同派遣を行った。これらは正式な協定制度がなくとも共同派遣が成立し得ることを示している。本発表では共同派遣の利点を整理し、道内大学が連携して国際教育を展開する新たなモデルの可能性を論じる。

日本語の世界観と英語の世界観

濱田 英人 (札幌大学名誉教授)

英語はゲルマン語を基礎として、古期ノルドやフランス語との言語接触によって SVO という語順が確立した言語であるのに対して、日本語は朝鮮半島を経由して日本列島に到達した渡来系弥生人の言語が日本語祖語となり、同じ SOV 言語である縄文語話者と交流・混交して形成された言語で、ヒトの原型言語の SOV 型を保持している。こうした成立過程の違いから、英語話者と日本語話者では出来事の捉え方も異なっており、この違いが英語は客観性が強く、日本語は主観性が強いとして特徴付けられてきた。本発表では、言語進化は生物進化と同様であり、言語コミュニケーション上必要な文法装置は発達するがそうでないものを発達したいという観点から、日本語はヒトの元々の素朴な感覚が比較的失われないまま残っている言語であり、「見え」のままを認識して表現する傾向が強いものに対して、英語は出来事を客体化して客観的に表現する傾向が強いことがそれぞれの言語の世界観を形成していることをいくつかの言語現象を取り上げて論じる。